

クワメ・ンクルマの政治思想

——『わが祖国への自伝』を読む——

阿久津 昌三

- 一 はじめに
- 二 民族誌的な「語り」
- 三 学校と規律——初等学校と師範学校
- 四 アメリカ留学

一 はじめに

自伝とは自分で書いた自身の伝記であると定義されている。また、自伝とは自叙伝とよばれることもある。自分を語ることに自分をも騙るというもうひとつの意味がある。自伝として知られているのは『フランクリン自伝』『ミル自伝』『福翁自伝』『ガンジー自伝』『ネルー自伝』『マンデラ自伝』など数多くある。ひとがいつ自伝を書くのかにはそれぞれの経緯があつてすべての作品によって違ってくる。自分の子供にあてた手紙という形で自伝を書くこともあれば、老年になって人生を振り返るものもあれば、壮年期になって少年から青年までのたど

ってきた人生について語るものもあれば、死を予感して書かれたものもある。

クワメ・ンクルマ (Kwame Nkrumah) の『自伝』は、Ghana: The Autobiography of Kwame Nkrumah という題名であり、ガーナがイギリスの植民地から独立した一九五七年に出版されたものである。邦訳では『わが祖国への自伝』(野間寛二郎訳)という題名で訳されている。なお、邦訳には原題にはない「アフリカ解放の思想」という副題がつけられている。また、「母に ささげる」という献辞とともに「この本の多くの部分の口述をひきうけ、多くの時間をささげて原稿整理をしてくれた私の秘書エリカ・パウエルに心から感謝する。彼女の努力がなかったら、この本は、こんな短い期間に完成することはできなかっただろう」と記述されている⁽¹⁾。

本書は、クワメ・ンクルマの個人の自伝なのか、黄金海岸 (Gold Coast) というイギリスの植民地から独立を遂げて新たに名づけられたガーナ (Ghana) というナショナルな自伝なのか、この『自伝』の意図するところにはこれらの二種類の意味が含まれているのではないかと気づかされる。つまり、ンクルマの『自伝』は自分を語る自伝であるとともにナショナルな自伝であるという意味である。これは原著の初版の日付を見ると、独立の日——一九五七年三月六日となっていることから理解することができる。前半部がンクルマの自伝であり、後半部はイギリス植民地の黄金海岸から独立を遂げたガーナの自伝となつていふ印象も受けるが、前半部と後半部の内容を交錯させながら、自分を語る自伝であるとともにナショナルな自伝であるという両義的な意図をもつて書かれている。言い換えれば、I was born……と同時に、Ghana was born……という「語り」であり、『自伝』の書き出しの「語り」は民族誌的な方法によつていふことに気づかされる。なお、ガーナの国名は黄金で盛名をはせた西アフリカの古代帝国ガーナに由来するものである。

二 民族誌的な「語り」

クワメ・ンクルマは、「わが生い立ちの記」のなかで、「私の誕生について、ただ一つ確かだと思われるのは、私がンジマのンクロフルの村に、九月なかばのある土曜日の昼ごろに生まれたというだけである」(The only certain facts about my birth appear to be that I was born in the village of Nkroful in Nzima around mid-day on a Saturday in mid-September)⁽²⁾と語りはじめる。さらに、故郷としてのンジマ (Nzima) は「黄金海岸の南西端にあって、東はアンコプラ川から、西はタノ川とその礁湖にまで広がる約一千平方マイルの面積をしめしていた。人口は現在約十万人であるが、ヨーロッパ人には長いあいだアポロニアとして知られていた。白人がはじめてンジマの土地に足を踏み入れたのが、聖アポロの祭日にあたっていたからである」⁽³⁾と語っている。

ンジマは、当時、イギリス領植民地の黄金海岸の南西部にあって、東はアンコプラ川から、西はタノ川とその礁湖にまで広がる約一千平方マイルの面積をしめしていたと語られている。現実には、フランス領植民地の象牙海岸の南東部にもンジマとよばれる人びとが生活していた。つまり、ンジマはイギリス領とフランス領の植民地にまたがって生活していたのである。ヨーロッパ列強によって分断された国境は独立以後の国民国家の境界となつたのはアフリカの植民地主義の現実でもあった。「ンジマはヨーロッパ人には長いあいだアポロニアとして知られていた」([Nzima] was known to Europeans for many years as Apollonia)⁽⁴⁾とある。ポルトガルの航海者がはじめてンジマの土地に足を踏み入れたのが一四七〇年または一四七一年の冬で聖アポロ (St Apollo) の祭日 (二月九日) にあたっていたからアポロニア (Apollonia) と名づけられたのである。ンクルマが生まれた当時はンジマは公文書にも東アポロニアと西アポロニアと記載されていた。アポロニアの名称が改称されて東ンジマと西ンジマとよばれるようになったのは一九二七年のことである。⁽⁵⁾

大西洋ギニア湾沿岸部の名称には、穀物（胡椒）海岸、象牙海岸、黄金海岸、奴隸海岸などがみられる。これらは、胡椒、象牙、黄金、奴隸というヨーロッパ人の「欲望」の商品名を冠したものである。ギニア湾沿岸部には、フランス、イギリス、オランダ、ポルトガル、デンマーク、スペイン、ブランデンブルグの城塞が築かれた。とりわけ黄金海岸沿岸部には数多くの城塞をみることができる。これらの城塞は、ヨーロッパ諸国間で争奪戦が繰り返され、奴隸を買い入れるための拠点であり、次の船がくるまでの奴隸の貯蔵庫でもあった。

クワメ・ンクルマは、『自伝』という語りの形式をとおして、自分が生まれた村から「自己」を語り始めるとともに、「黄金海岸」という植民地支配——その象徴としての「アポロニア」という版図の名づけ——のもとでナショナルな自伝を語りかけるのである。

植民地政府の権力の言説は「名づける」という行為をとおして表象されている。外部からの闖入者である航海者や宣教師や人類学者たちは「名づける」という行為をとおして植民地支配に加担していた。地図は、植民地政府の領土的主張の推進とその解決——主として境界線の取り決めの両方でつかわれる。アポロニアの名前は植民地支配の言説を表象したものであり、ポルトガルが西アフリカのギニア湾から撤退してオランダ、イギリス、フランスの植民地支配の競争のなかで、東アポロニアと西アポロニアに、そして東ンジマと西ンジマと改称されることでイギリス領植民地とフランス領植民地の境界線が線引きされたという植民地支配の「過去」について物語るものである。クワメ・ンクルマは、『自伝』のなかで、帝国主義の言説を「アポロニア」という地名に読みとり、「ンジマ」という民族の概念を主張することで主体性の回復のための第一歩としている。

『自伝』の初版本を見ると、表紙は、赤と黄と緑の三色に中央に黒い星 (Black Star) のガーナの国旗とクワメ・ンクルマの肖像写真がある。表紙の折り返しには、「だれかに統治されるよりは、統治するか、危険をともしよう統治を選ぶ」 (It is far better to be free to govern, or misgovern yourself than to be govern by anybody else) という

言葉が記述されている（会議人民党 Convention People's Party〔以下C.P.P.と略す〕のスローガンでは「奴隷として安住するよりは、危険をとまなう自治を選ぶ」という言葉が選ばれている）。その下にクワメ・ンクルマの略歴が記載されている。その見返しには植民地時代のギニア湾沿岸部を中心とした西アフリカの古地図が装丁されている。この地図の中央部にはかつての栄光の黄金の帝国であったガーナの国名が記載されている。この地図は、王立科学アカデミー会員の Guillaume Delisle による「野蛮、ニジェール、ギニア地図」(Carte de la Barbarie de la Nigritie et de la Guinée)（一七〇〇—一二年頃の出版とされる）である。

ンクロフルはアンコプラ川に近い村で、後に、ンクルマは三才近くまで母 (Elizabeth Nyanibah) とこの村で過ごし、金細工師をしていた父 (Kofi Ngonloma) が住む、タノ川に近いハーフ・アンニの村に移った。ンクルマは、『自伝』のなかで、さらに、「黄金海岸の周縁地域では、だれも、西洋世界の慣習のように、誕生や結婚や死んだ日を記録しようとはしない。そのような出来事も祝祭をすることで注目されるだけである。(私たちの) 部族の慣習では、母親は子供がうまれてから民族の祝祭の祝われた回数を数えることで子供の年齢を推定する。しかし、この祭りの数さえわからない場合が多い——平和な社会では、時間を数える必要がないからである」⁽⁶⁾と語り続ける。ここでは西洋世界との対比で大英帝国の周縁にある黄金海岸という植民地のさらに周縁地域をとりあげて「平和な社会では、時間を数える必要がないからである」(time did not count in those peaceful communities)⁽⁷⁾と部族世界では「時間」の概念が西洋世界とは異なると語るのである。

ンジマという民族集団が属するアカンでは直線的な時間と循環する時間があり、「過去」「現在」「未来」というヨーロッパ中心主義的な直線的な時間の流れだけで解釈することはできない。アカンの哲学者のクワメ・ジェチェ (Kwame Gyegye) は、「アカンには時間に関する具体的な観念があり、「ときが飛ぶ」(time flies) とか「ときは変わる」(time change) という表現がアカンの「時間」の観念のなかにあるように、時間には「動き」(mo-

tion) があると述べている。

「これらは時間の具体的な観念を表現するものである。アカンの思想家は一般的に具体的な用語において思考するという事実からすれば、彼らが具体的な諸概念を欠いているのだという意味ではないことがわかるだろう。アカンの思想家は、時間は変化と発展と結びついた具体的な現実であると考えている。時間は、〈飛ぶ〉という観念があることを示唆する諺にみられるように、動きと、そして変化と変革と密接な関係があるのである。次いで、時間を経験するとは具体的な変化、発展、生成、衰退を経験することである。(中略) 時間は変化、過程、出来事と結びついているということである」⁽⁸⁾。

アカン哲学には、時間は変化、過程、出来事にかかわるという思想があることを提示している。ジェチエは、アカンの思想では「出来事は時間を構成するものではない」「出来事は時間の存在という意識を生成するものではない」とし、時間は「出来事や変化が起きる、また、出来事の日読みが可能である範囲内」で、客観的な存在として認識されると述べている。 f_1 、 f_2 、 f_3 など……という「年」の異なる時間におこなわれる「祭り」の事例をとりあげて、 f_1 は f_2 の「前」(ansa)、 f_3 は f_2 の「後」(akvi) に起きると言及できただけであるとしている。⁽⁹⁾ クワメ・ンクルマは、「時間」の概念が西洋世界 (western world) とは異なることを説明したうえで、自分の誕生日がいつなのかという『自伝』の根本問題にはいるのである。

「ンジマの民族の祝祭はクントウムとよばれる。私の母の計算によれば、私が生まれてから、クントウムは四十五回あった。つまり、私は一九一二年に生まれたことになる。ところが後に、ローマ・カトリック教会へ私を導いて洗礼を受けさせた牧師は、私の誕生日を一九〇九年九月二十一日と記録した。むろん彼の推測にすぎないが、私は公式文書に

はいつもこの年月日を記すことにした。これを正確だと信じているからではなくて、官庁と関係する場合に、いざこざが少なくて済むからだ。しかし最近になって、この推測が事実にかなり近いらしいことを知った⁽¹⁰⁾」。

ンクルマはンジマの祭りをクントウム (*kuntum*) と記述しているが、これはンジマやアハンタに属さない人びとによる呼称であり、正確には、ンジマやアハンタではクンドウム (*kundum*) とよばれる祭りである。クンドウムは、東はアンコプラ川から、西はタノ川とその礁湖にまで広がるンジマで開催される新年の祭りである。この祭りは六月から八月にかけて東から西へと地域を次々と移動しながら開催される。作物の豊穡と収穫を女神に感謝すると同時に祖霊を癒すことを「祭り」の本質としている。この祭りでは、男性が女装をしたり、海藻や雑草で身体を覆う仮装をしたり、女性が悪魔払いの儀式で変装したりするという場面がみられる⁽¹¹⁾。

この祭りの遠い記憶から、クワメ・ンクルマは、さらに『自伝』のなかで、一九一三年八月二十七日の夜に座礁したブリティッシュ・アフリカン汽船会社の「バカナ号」の事件について語りかける。ローマ・カトリック教会の洗礼を受けた時に、ンクルマの誕生日は一九〇九年九月二十一日とされ、名前は、フランシス・ニャッコ・フィ・ンクルマ (*Francis Nya-Kofi Nkrumah*) と記載されることになった。フランシスは洗礼名であり、ニャは母の名前、コフィは父の名前を継承したものである。コフィは金曜日に生まれた男子につけられる名前である。また、ンクルマという名前はンジマの慣習にもとづいたものである。ンクルマは、ローマ・カトリック教会の登録簿に書き記されたことに異議申し立てをするのである。つまり、「アポロニア」と名づけられた地名、黄金海岸という植民地の地名と同様に、「名前」を復権することで主体性の回復を意図している。あるいは、後述することであるが「無宗派のクリスチャン」と宣言することにも関連している。

出口顯は、『名前のアルケオロジー』のなかで、「固有名詞とみなされる人名は、社会のなかの個人にとっては

その主体性の証しであるようにみえるが、実は、権力の網の目の作り出した社会空間のなかの特定の位置に人が配置・分類され、ひそかにその権力の作用を受ける臣下であることの証しなのである⁽¹²⁾」と述べている。ンクルマは、主体性の回復、つまり「名前」を復権するためにはたしてどのようなプロセスをたどることになるのだろうか。『自伝』のもっとも重要な箇所なので少し長いが引用してみることにする。

「最近ンジマで短い休日を過ごし、子供のころ遊んだ場所を訪ねて、その時代を思いだす機会をえたのだが、ハーフ・アンニの海岸に数名の友人と腰をおろしていたとき、バカマ号の老朽した船体が目にはいった。この貨物船はブリティッシュ・アフリカ汽船会社の持船で、一九一三年に難破して海岸にのりあげたのである。バカマ号の事件は、私にとって遠い過去の出来事だが、これが私の年齢を明らかにするうえで役立とうとは、これまで考えたこともなかった。友人のひとり、どうしたのか、あの船のことをおぼえているのか、と尋ねた。当時私はせいぜい三才か四才だったが、そのとき聞かされたこの船の難破のようをはっきり記憶している。

一九一三年八月二十七日、バカナ号は、油を積んでナイジェリアからイギリス本国へむかう途中、デイクシコブとハーフ・アンニの間で激しいよせ波にまきこまれて危険に瀕した。船長は船を沖にむけようと努力したが、強い流れにひかれて船はしだいに岸に近づき、ついに推進器を砂のなかに五フィートもめりこませて岸にのりあげた。翌日、エバニ号とワリ号の二隻が到着して、バカナ号を沖へひきだそうと努力したが動かなかった。船長のリチャード・ウィリアムは船を捨てるように命じ船員と少数の乗客はボートに乗り移って、無事に岸に上がった。だが船長自身は、他の一隻の船にむかう途中、ハシケが転覆して、おぼれ死んだ。船長の屍体は海中から発見され、ハーフ・アシニの中央に葬られた。墓石は風雨にいためられているが、文字の多くはまだ読むことができる——『船長リチャード・ウィリアム 一九一三年八月二十八日、よせ波のなかに死す四十才——日は明け、影は消える』。私がつきりと思いだすのは、この船の難破の原因について、村に広まった話である。それは、アマ・アズレ川の神がアウィアニアルヌ川の女神を

訪れようと思い、船を意のままに操るためにこの災害を起こしたというのである⁽¹³⁾。

バカナ号の写真は、ガーナの首都アクラの「二月二十八日街」(28th February Road)にある「クワメ・ンクルマ記念公園」(Kwame Nkrumah Memorial Park)にも展示されている。この街路名は、ンクルマがクーデターで権力を失墜した一九六六年二月二十八日を記念して名づけられたものである。ンクルマの名誉回復とともに記念公園が設置された。バカナ号の難破と女神をとりまくンジマの神話的な世界がどのような相関関係にあるかは定かではないが、ンクルマが生まれた年が確定されることになる。

「母は、当時の私はまだ幼く、その私をつれてンクロフルから、ハーフ・アシニにいた父と一緒に住むために移った直後にこの事件が起こったと話して、私の推定を裏書きしてくれた。だがら、私の生まれた年を一九〇九年とすれば、その年の九月のなかば⁽¹⁴⁾にもっとも近い土曜日は十八日になる。したがって、おそらく私は、一九〇九年九月十八日の土曜日に生まれたのだらう」。

クワメ・ンクルマの誕生である。——というか、イギリスの植民地の黄金海岸という国名を改めて「ガーナ」という新しい国家が誕生したように、ローマ・カトリック教会で名づけられたフランシス・ニャロコフィ・ンクルマという名前を改めて、記念すべき独立の日に出版を合わせた『自伝』において、クワメ・ンクルマという名前で政治的な舞台に登場することになる。しかしながら、「最近ンジマで短い休日過ごし、子供のころ遊んだ場所を訪ねて、その時代を思いだす機会をえた」とあるから、「自伝」という形式をとった「騙り」である。実際には、一九四五年にイギリスでクワメ・ンクルマと改名して活動している。また、ンクルマは『自伝』のなか

で「私は無宗派のクリスチャンでありマルクス主義的社会主義者である」(I am a non-denominational Christian and a Marxist socialist)⁽¹⁵⁾と宣言しているから、フランシスという洗礼名を捨てるという行為はローマ・カトリック教会との決別とも解することができる。カトリシズムから、後述する禁欲主義・勤労倫理に見るプロテスタントへの移行、転回、回心は容易であったのかもしれない。あるいは奨学金を得た長老派教会との関係からカトリック教会を離脱して無宗派のクリスチャンとなったことが考えられる。

クワメ・ンクルマが一九三五年三月一日付けでリンカーン大学に提出した入学願書を見ると、自署欄には、F・ニャ・コフィ・ンクルマ(F. Nya Kofi Nkrumah)と記載されている。また、生年月日についても一九〇九年九月二十一日と記載されている。⁽¹⁶⁾クワメ・ンクルマが、アメリカでの留学を終えてイギリスでパンアフリカニズム(Pan-Africanism)運動に参加していた時期に、「名前」を改名し、また「誕生日」を変更し「クワメ・ンクルマ」を名乗り、さらに独立時には「国名」を黄金海岸から「ガーナ」に改名した背景にはどのような経緯があったのか。ンクルマの政治思想の遍歴のなかで問い直すという作業がきわめて重要である。つまり、ジャック・デリダ(Jacques Derrida)の『根源の彼方に——グラマトロジー』のように、「名づける」という行為に内在する暴力について次のように語っていることを問い直す作業でもある。

「実際、名づけるという第一の暴力が存在したのである。名づけること、場合によっては口に出すのが禁じられるであろうような名前を与えること、これが言語の根源的な暴力であって、これは差異の中に絶対的なよびかけ符号を書き込み、それをクラス分けし、宙吊りにする。独自のものを体系のなかで思惟すること、それを体系に刻み込むこと。これが原Ⅱエクリチュールの所作である。つまり、原Ⅱ暴力であり、固有なもの、絶対的近接性の、『自己』への現前の、喪失であって、実際、決して生じなかったものの喪失。決して与えられはしなかったが夢みられ、いつもすでに二

重化され繰り返され、自己自身の喪失においてしか出現することのできなかった一つの『自己への現存』の喪失なのだ⁽¹⁷⁾。

クワメという名前がどのような意味をもっているのかについてンクルマは『自伝』のなかで次のように語りかける。これらの記述もまた民族誌的な「語り」となっている。

「子供の生まれた曜日は、子供のプラトニックな霊魂を決めるとして、アカンではとても重要なこととされる。人間には三つの霊魂があると信じられている——女から伝えられて血縁に共通すると考えられている血の霊魂（モジャ）、男から伝えられるントロ、そしてプラトニックな霊魂であるオクラ。このオクラに間違いを起こさないように、子供は生まれた曜日にしたがって、特定の名前をつけられるのである。日曜日に生まれた男の子はクワシ、月曜日に生まれるとコジョというように、土曜日に生まれた男の子はクワメという名前になる」⁽¹⁸⁾。

土曜日に生まれた男の子に名づけられるクワメであるというンクルマの確信は「私の生まれた日に、ンクロフルの村では大きな祭りがあって、太鼓が鳴らされた。しかし私の誕生を祝うためではなくて、その少し前に死んだ私の父の母の葬式のためであった⁽¹⁹⁾」という葬式によって裏書きされることになる。アカンの民族では葬式は一般的に土曜日に開催される。フランシス・ニャロコフィ・ンクルマという「官庁」と関係する場合にいざこざがなくて済むという理由で名のつてきた名前をクワメ・ンクルマと改名することで政治的な舞台に登場する。

さらに、『自伝』の民族誌的な「語り」は家族制度にまで展開する。具体的には、一夫多妻制という結婚形態についてである。ジョモ・ケニヤッタの『ケニア山の麓』（一九三八年）の民族誌を想起させる。

「私たちは大家族だった。私は母と父のただひとりの子供だったが、父は、ネイティヴの習慣で結婚した他の妻たちによって、私のほかに多くの子供をもっていた。一夫多妻制は過去には完全に合法的であつたし、今日でも男が養える範囲で多くの妻をもつことは認められている。実際には多数の妻をかかえている男ほど、その社会的な地位も高い。一夫一妻主義を奉じている人びとにとっては、不都合で不満足に思われるであろう、このような生活習慣は、私が男性であるということを除外しても、男が本来多妻的であることは、しばしば認められている。アフリカ人のおこなっていることは、この事実を認め、男性が存続するかぎり、これまでもおこなわれ、今後も継続しておこなわれると思われることを認めて合法化し、あるいは社会的に容認しようとしているだけである。この一夫多妻制の社会での離婚が、一夫一婦制の社会よりもずっとたやすく成立するにもかかわらず、離婚の数が一夫一婦制より少ないのは、興味がある。——あるとすれば、姦通、不妊あるいは性交不能、飲酒癖、性的不釣り合い、婦人の喧嘩好きの性質、姑との不和、族内結婚を発見されたときである⁽²⁰⁾」。

家族の形態には小家族と大家族がある。西洋世界の小家族と対比させて、シクルマは「私たちは大家族だった」と語る。さらに、ネイティヴの習慣 (native custom) にしたがって、父は母以外に複数の妻がいたと語り、「一夫多妻制」(polygamy) は「過去には完全に合法的であつたし、今日でも男が養える範囲で多くの妻をもつことは認められている」、西洋世界の「一夫一婦制」(monogamy) と対比させて「不都合で不満足に思われるであろうこのような(一夫多妻制の)生活習慣」は、「男が本来多妻的である」(man is naturally polygamous) として認められている。その証拠に「西洋世界の一夫一婦制に比べて、一夫多妻制の社会では離婚が少ないのは興味ある事実である」と語っている。この最後の語りが、リバプールの材木代理店で働く夫妻に泊めてもらった時の体験と裏返しになっている。妻が夫に「馬鹿にするな」という「アフリカだったら離婚になりそうな」発言につい

てである。「むろん今日では、ヨーロッパの影響もうけて、女は自分の考えを遠慮なく口にだし、夫たちもそれをあきらめはじめているが」とンクルマは語っている。⁽²¹⁾さらに、大家族や一夫多妻制の社会では「歓待すること」に価値をおいていると語るのである。

「直系の家族——全部で二十四人——のほかに、私たちのところにはほとんどいつも親戚が滞在し、そのために小さな家はいつも人間でごったがえしていた。親戚は、どんなに縁が遠くても、好きなときにその一人の家を訪ね、その家で好きな期間暮らしてもよいというのが、アフリカ人の習慣である。親戚が訪ねてきても、いつまで滞在するとか、いつ帰るかなど尋ねる者はいない。この習慣はしばしば濫用される。というのも、家族の一人が成功すると、その家のかは遠い血縁を主張する男や女であふれて、彼の財産がなくなるまで、彼の費用で暮らすということがおこるためである。私の家族は全部がまことに平和に暮らしていて、争いの記憶はほとんどない。女たちは交替で料理をし、父の世話をする一方、畑に出て働いたり、家族の収入を増すために小さな商売をしたりした。私たち子供の生活は、朝から晩まで遊ぶよりほかにすることがなにもないという、まことにすばらしいものだ⁽²²⁾」。

ンクルマはパンアフリカニズムを提唱するときに「部族主義」(tribalism)を批判することになる。しかしながら、「首長制」(chiefdom)については批判をしていないことは見逃せない事実である。『自伝』の表紙にも、国連の演説などの政治的な舞台でも、ンクルマはケンテクロス(kente cloth)という祝儀礼用の衣装をまとっている。つまり、クワメ・ンクルマには王権がつきまとうのである。言い換えれば、ンクルマは王になろうとした政治家であるということである。つまり、ンクルマには王権に対する「怨望」がみられる。⁽²³⁾これは「母はまた私たちの遠い祖先の歴史、族長のアドゥク・アダイエのこと、数世紀前にンジマに移住してきた先祖のこと、その姉妹のンウィアが私の母系を創ったことなどをこまかに話してくれた。また私がこの国で二つの首長位、ワサ

ウ・フィアセとアオウインのダディエソの首長となる資格があることを語ってくれた。私は母の話の全部をノートに書き、肌身離さずもっていたが、後にニューヨークの地下鉄でそれを失くしてしまった⁽²⁴⁾という、アメリカに旅立つことを母に打ち明けたときの会話のなかにみられる。

クワメ・ンクルマは、一九四一年に、ペンシルベニア大学教育学部の『教育展望』(Educational Outlook)という雑誌に「西アフリカの未開の教育」という論文を執筆している。この論文は、「アーサー・J・ジョーンズ教授の『ガイダンスの原理』によれば、教育の目的とは個人を生活の諸活動にいかに関与的に参加させるかを準備させることである」という文章で始まる⁽²⁵⁾。この論文でも、「西洋」と対比されるのは「未開」であり「ネイティブ」であり「部族」という用語である。この論文ではンジマの少女の事例をとりあげながら西アフリカの子女教育を論述している。この論文を読むと、ンクルマが教育学を真剣に学んでいた姿が浮かびあがる。その二年後には『教育展望』に「アフリカの教育とナショナリズム」と題する論文を執筆している⁽²⁶⁾。ンクルマの帝国主義批判が芽生えていることがわかる。クワメ・ンクルマがどのような学校教育を受け、アクラ郊外の師範学校卒業、そして教師生活を経て、リンカーン大学、さらにペンシルベニア大学で何を学んだのか、その過程で、どのような思想が形成されるようになるのかを検討してみよう。

三 学校と規律——初等学校と師範学校

クワメ・ンクルマの父は金細工師、母はマーケット・マミーであった。父も母も正式な教育を受けたことはなかったが、母はンクルマ少年をなるべく学校に通わせようと決心していた。父も母に説得されて学校に通うように強く主張した。クワメ・ンクルマは一九一八年にハーフ・アンニのカトリック初等学校に入学する⁽²⁷⁾。

「学校の最初の日はまだことにみじめだったので、私は二度と行かないつもりで逃げて帰った。しかし母は私のいきり立った抗議には耳もかさず、毎朝私の腕をしずかに、しっかりとつかまえて、私を教室へ連れていった。私は戦いにまけたわけだ。どうせ学校へ行かなければならないなら、学校を好きになって、勉強にも努力してみようと決心した。ところが驚いたことに、すぐに勉強が好きになって、毎日学校へ行くのを待ちうけるようになった。しかしへムチを惜しめば子供をそこなう」という諺をまじめに、積極的に信じている教師は、私には実のところ身体が震えるほど恐ろしかった。私は、自分の意志に反して物事を強制されるのを好まなかった。そういう経験がなかったからだ。それで、教師のいないところで自由に勉強させてくれたら学校は楽園になるのに、とよく考えたものだ。一つの教室に全部の学年の生徒が集まり、このクラスを教師はいつも同時に教えた。だから教師の仕事はたいへんだったにはちがいないが、それを軽減するようなことを私たちはなにひとつしなかった」⁽²⁸⁾。

教師は「ムチを惜しめば子供をそこなう」(spare the rod and spoil the child) という言葉を積極的に信じている教育方針をもっていた。ンクルマ少年は身体が震えるほど恐ろしかった、また、規律というものを初めて教えられたとも語っている。

「教師がしばしば、正当な理由がないと思われるときでも棒を振りあげたので、私たちは教師を好まなかった。ある日、視学が学校へ来ることを知り、それを教師への復讐の機会にしようと考えた。私たちはそろって視学が来る日をまる一日サボることに決めた。私がただ一つ残念に思ったのは、からっぽの教室を見たときの視学の表情、それよりも教師の顔に浮かぶ恐怖と驚きの表情を見られないことだった。教師がひじょうに困惑したことは間違いないだろう。しかし翌日、教師は敗北後の勝利をえた。私たちが顔を見せるのを、棒をもって待ちかまえていたのだ。私たちは裸にされ

て、尻を二十四回ずつなぐられた。痛くて、それから三日間は学校の椅子に腰をかけることができなかったほどだ。だが、私たちの身体と誇りがどんなに傷つけられても当りまえだということを、私ははっきり理解した。その日以後私は、自分が受けるに値する罰は、いつも、どんなに不面目でも、受けなければならないということを知った⁽²⁹⁾。

南アフリカのエンダバニン・シトレ (Ndabaning Sihole) もまた教師の鞭について次のように述べている。

「われわれの教師は非常に厳格な人で、鞭が必要と思えば容赦しなかった。かれが鞭を使ったのは、われわれに授業を敏速、かつ徹底的にマスターさせ、また、われわれが騒いでいるときには、静粛にさせ、よく出席させ、そして、正確な時間に登校させるためだった。教師の鞭には魔力があった。鞭は、かれの思うことを確実にした。(中略) 教師が絶えず鞭をふるうにもかかわらず、われわれは学校が好きだった。授業と鞭は、切っても切り離せないものとなった。われわれは、みんな、鞭なしには真の授業はありえない、という事実を認めた。鞭は日課であつた⁽³⁰⁾」。

クワメ・ンクルマは一九二六年にカトリック初等学校を卒業する。母は以前にカトリックに改宗していたが、ンクルマも母とフィッシャー牧師をとおしてローマ・カトリック教会の洗礼を受けた。初等学校で八年間を過ごしたのちに、イギリスの教育の伝統にしたがってもハーフ・アンニの初等学校で一年間教生(授業を受けながら他の学校の生徒に教える教員 pupil-teacher)をつとめた。身体があまり大きくなかったので黒板に字を書くのに箱の上に乗らなければならなかったと語っている。ときにンクルマは十七才である。そんなとき、アクラの師範学校の校長が初等学校を訪問することになり、ンクルマの授業を参観してひじょうに感心をしめし教員資格を取得するために師範学校に入学するように薦められる。クワメ・ンクルマにとってひとつの僥倖である。

「これが私の生涯の一つの転機となった。翌年、私はその師範学校へ行った。田舎の青年だった私は、都会の生活に面くらしい、家を離れて寄宿学校にはいった多くの少年と同じように、強いホームシックにかかった。アクラの往来や雑踏する街や騒音に比べると、沙漠のなかの道のような砂の道路をもつハーフ・アシニのほうがよいと思われた⁽³¹⁾」。

初等学校では「ムチを惜しめば子供をそこなう」という言葉を信じている教師に規律を学ぶが、師範学校でも新たな規律——学寮の規律と寮監の懲罰——を学ぶことになる。これらの規律と懲罰の言説がまた後に反ンクルマイズムの批判の対象となるのである。

「新入生の受けなければならぬいたずらやいじめという制裁もあった。これがけっこう長く続いたので、あの日、私は、こんなにみじめな思いをしてまで教育を受ける値打ちがあるだろうかと考えた。ちょうどその頃、虐待者のひとりが、まるで仲間であるかのように私に話しかけた。私はテストに合格したようであった。その後、次の新入生をやっつけるのに誘われて、一人前になったことを知った⁽³²⁾」。

「私に対して、いちばん小言をいったのは、寮監だろう。この寮監が〈テコにおえん奴〉というレッテルを私に貼ったのも、驚くにあたらない。寮監のような厳しい規律家にとっては、私は辛抱できない人間だったにちがいない。規則や規約に従うことを私がいやがったというより、実際はそれに従うために絶望的な努力をしていたのだが、生来私には、どんなに好きなことについてでも、他人から命令されるのに辛抱できない性質があったのだ。いちばん厄介なのが、毎週日曜日の夕方のチャペルの礼拝前の点呼であった。この点呼はひじょうに重要視され、全生徒が必ず整列し、正当な理由がないかぎり、欠席は認められなかった。〈アグレイの家〉では、寮監はなるべく厳しくしようと努めていたらしく、私たちへの話し方もまるで鞭を打ったようであった。寮監に呼ばれて面と向かって鋭い言葉を聞かされるのがいやさに、

私はどんなことがあってもこの点呼だけは遅れまいと努めた。しかし一度だけ、それに失敗したことがある……⁽³³⁾。

師範学校は、直轄植民地黄金海岸総督フレデリック・ゴードン・グギスバーク卿 (Sir Frederick Gordon Guggisberg) の提唱により設置されたものである。グギスバーク卿は「教育は進歩の要石である」という教育哲学のもとに十五の教育諸原理を定式化している。⁽³⁴⁾後に設置されるケープコースト学校とともに将来のガーナにおける教員養成系大学の骨格となるものである。ンクルマはアチモタでは教師としての訓練を受けた最初の学年であった。教育実習で中学生たちと生活を共にすることになる。ンクルマは、将来のロンドン大学入学試験に役立つだろうと考えて、中学生の生徒からラテン語の初歩と高等数学を学び、お返しに、教育心理学などカリキュラム外の科目を教えるという経験をしたと語っている。イギリスの大学に留学するのは当時の黄金海岸のエリートたちの夢でもあった。

師範学校には、クワメ・ンクルマが『自伝』のなかでも語っているように、ンクルマが師範学校でもっとも感銘をうけたクエギル・アグレイ (James Emaan Kwegyir Aggrey) がいたことはきわめて重要である。アグレイは「アフリカの教育の父」とよばれている。ンクルマは『自伝』のなかで次のように語る。

「当時、アフリカ人の全部が注目していたのは、アフリカ人としてはじめて大学の中核に参加した副総長補佐のクエギル・アグレイ博士であった。私には博士がそれまでに会った誰よりも偉大な人物に見え、私は心から彼を慕った。アグレイ博士ははげしい生活力と熱情と腹の底からわきでるような明るい笑い声をもち、その上にまれにみる大雄弁家でもあった。私の民族主義が培われたのは、博士のおかげである。博士は自分の皮膚の色を何よりも誇っていたが、人種差別はどんな形のものにも強く反対した。マークス・ガーヴェイの〈アフリカ人のためのアフリカ〉 (African for

the Africans) という原則に対しても、それを理解はしていたが、攻撃をためらったことはない。黒人と白人の協同が、博士の思想の骨子であり、博士の布教の眼目であった⁽³⁵⁾」。

「白い鍵盤だけでも音はだせるし、黒い鍵盤だけでもある音はだせる。しかしハーモニーをつくるためには、黒と白の両方の鍵盤を使わなければならない」(You can play a tune of sorts on the white keys, and you can play a tune of sorts on the black keys, but for harmony you must use both the black and the white)⁽³⁶⁾ というのがアグレイ思想の言説でもよく知られているものである。ンクルマはアグレイ思想にもあきたらず「ハーモニーは黒色人種が白色人種と対等に扱われてはじめて存在できるものであり、自由な独立した民衆——自分の政府をもつ民衆——だけが、他の民衆に対して、人種その他のことについての対等を主張できる」と考えていた。アグレイがンクルマにあたえた思想的な影響は計り知れないものがあつた。そのアグレイは、一九二七年五月に、イギリスを経由してニューヨークに渡り、そこで急病に罹り、ハーレムの病院で治療を受けるものの七月下旬に永眠してしまう。ンクルマにとって偉大な指導者を永遠に失うこととなった。

「(アグレイ博士が死んだという知らせを聞いて) 私は激しいショックを受けた。この偉大な人物の指導を永久に失ったという思いが強まりそのために私はあらゆることに興味を失って、少なくとも三日間は、何ひとつ食べることができなかった。しかし胃の腑がカラでも、勉強を続けるエネルギーだけはあふれるほどあることに気づいたのも、このときだった。この発見は、後にアメリカやイギリスへ行ったときにたいへんに貴重なものになった。私は貧乏なために食事をとらずに——勉強もし、休暇には大学の授業料をかせぐために働きもしなければならなかったからである。アグレイを、人としてまた学者として、心から尊敬していたことから、アメリカへ行ってもっと勉強しよう、と私は考えはじめた。そのために、師範学校の課程を終えたら、五年間教師をして、そのあいだに旅費をためるという計画をたてた⁽³⁷⁾」。

クワメ・ンクルマは「アメリカへ行ってもっと勉強しよう、と私は考えはじめた。そのために、師範学校の課程を終えたら、五年間教師をして、そのあいだに旅費をためる」という計画を立案するのである。ここにみられる禁欲主義と勤労倫理はマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九二〇年）にも描かれている『フランクリン自伝』の語りをとおしてセシル・ローズ (Cecil Rhodes) の生き方を想起させるものである。また、「性」の禁欲については『ガンジー自伝』をモデルにしているように思われる。ンクルマの禁欲主義と勤労倫理については稿を改めて論じたい。⁽³⁸⁾

ここでクエギル・アグレイとはどんな人物なのかを見ておこう。⁽³⁹⁾ アグレイは一八七五年十月十八日に黄金海岸のアノバモに生まれた。一八八三年六月二十四日に洗礼を受ける。洗礼名がジェームズである。アノバモから十五マイル離れたケープコーストのメソジスト学校に入学する。すでにギリシア語とラテン語を修養していたとされる。学校を卒業後にいくつかの学校の教員を経験してケープコーストのウェスレー記念学校の教員となり一八八九年に学校長となる。イギリスとアシャンティ (アサンテ) 戦争にイギリス軍の兵士として従軍する。一八九八年七月十日、二十三才のときにアメリカ合衆国に旅立ち、ノースカロライナ州のソールズベリーに滞在してリビングストン大学に入学する。アグレイは大学で化学、物理学、論理学、経済学、政治学などを学ぶ。一九〇二年五月に三年制の人文課程を卒業する。彼は言語の才能には優れたものがあり英語に加えてフランス語、ドイツ語、古代ギリシア語、現代ギリシア語、ラテン語に堪能であったという。一九〇三年五月にはシオン・メソジスト教会の牧師に叙任され、一九一二年には神学、一九一四年には整骨療法で博士の学位を授与されている。さらに一九一五年から一九一七年までコロンビア大学で勉学を続けて社会学、心理学、日本語学などを学び、一九二三年には哲学の学位を授与されている。

一九二〇年にはニューヨークに本部を置くペルプス・ストークス財団 (Phelps-Stokes Fund)⁽⁴⁰⁾ によりアフリカの教育改善計画調査のために、シエラレオネ、リベリア (九月)、黄金海岸 (十一月)、ナイジェリア (十一月)、カメルーン (十二月)、一九二二年にはベルギー領コンゴ (二月)、一九二四年にはアンゴラ (十一月)、ケニア (二月三月)、ウガンダ (三月)、タンガニカ、ザンジバル (三四月)、ニアサランド、ローデシア (四六月)、南アフリカ (六月)、黄金海岸 (十月) を視察している。アグレイはアフリカの教育がいかに重要であるかを実感する。一九二四年には黄金海岸総督のゴードン・グギスバーグ卿の提唱によりアチモタ大学副学長補佐に就任する。アグレイは一九〇五年にローズ・ダグラスと結婚している。結婚五年以内に三人の子どもが生まれ、一九二六年に四人目の子どもが生まれた。その子どもの名前がオルソン・ルドルフ・グギスバーグと名づけられていることから総督との親密性をうかがうことができよう。

アグレイにとって南アフリカの人種差別の現実はいわゆる衝撃的であったにちがいない。アグレイは人種と皮膚の色についてピアノの鍵盤にたとえて表現している。かれの夢であるアチモタ学校は一九二七年一月二十八日に創設される。しかし、その年にアグレイは米国に帰国するが急病で永遠の眠りについてしまう。アグレイが死んだ直後に、ンクルマは数名の学生たちと「アグレイの学生たちの会」 (Aggrey Students' Society) を創設した。これは演説をしたり討論をする場となり、将来のンクルマが名演説家として知られる修行の場となった。

「ある見解に同意するしないを問わず、私はいつも少数派の味方になった。それによって討論が長びき、ふだんは考へもしない意見をのべる機会が与えられたからである。私は、最初はどんなに不利な立場にいても、最後には私の便宜的に支持した考え方に反対派を屈服させ、討論を勝利のうちに終わらせる場合が多いことに気づいた。当時はむしろ一つの競技にすぎなかったが、後にはこれがひじょうに貴重なものとなった。もしこの〈おしゃべりの才能〉がなかった

ら、私の闘いは緒戦で敗れ、私たちの闘争の全部が無駄になったと思われるのである⁽⁴¹⁾。

クワメ・ンクルマは、一九三〇年にアチモタのプリンス・オブ・ウェールズ大学を卒業し教員免許を取得して、エルミナのローマ・カソリック下級学校初等科の教員となる（後に、アキシムのローマ・カソリック下級学校初等科の校長となる）。一年後にアミサノのローマ・カソリック下級学校初等科の専任教員となる⁽⁴²⁾。この学校にいるあいだにロンドン大学の入学試験に備えるために通信講座をとる。この講座でラテン語と数学の試験に落第したもののリンカーン大学に入学するためにとても役に立ったとンクルマは語っている。また、クワメ・ンクルマは『自伝』のなかで「勉強以外の暇な時間はンジマ文学協会をつくるのに使った⁽⁴³⁾」とあり、この文学協会の活動を通して S・R・ウッド (S. R. Wood) に会おうというもうひとつの僥倖がある。イギリス領西アフリカ国民会議 (National Congress of British West Africa) の秘書となったウッドについては稿を改めて論じることになるが、ンジマ文学協会 (Nzima Literature Society) の活動はクウラム牧師 (Rev. S. E. Quarm) によって一九三三年に創設されたものである。文字に書かれていない、そのために曖昧なものになって消滅してしまいがちな文学（口頭文学）を研究対象とすることで、ンジマの主体性を回復するためのものであった。卒業して二十年後に、ガーナ大学においてンクルマは「プラトンの政治哲学」(The Political Philosophy of Plato) という題目で講演をしたことが知られている。

神学学校での教師生活は、「規律をいつもけとばしてきたこれまでと違って、この学校の規則にすなおに服している内に、それが私には楽しくも感じられてきた」「宗教的な熱情がふたたび激しく燃えあがり、私も僧職を得ようと」⁽⁴⁴⁾と考えていたが「もっと学問を続けよう、そのためにアメリカに行こう、という前の考えがふたたび私の心をしめる」ことになった。これも後にンクルマが提唱する「積極行動」(positive action) のひとつである。

つまり、牧師を養成するために創設された神学校の「壁」に閉じ込められる「意識」からの解放である。この解放のきつかけとなったのがナイジェリアのンナミジ・アジキエ (Nnandi Azikiwe) (通称 Zik) の『アフリカン・モーニング・ポスト』紙 (The African Morning Post) の記事である。ンクルマはアジキエと出会うことで「私の民族意識がよみがえった」と語っている。

「アジキエはアメリカの大学を卒業しており、数年前にアクラで開かれた黄金海岸教師組合 (The Gold Coast Teachers' Association) の会合で彼の演説をした後、私は彼にはじめて会ったのだが、そのとき強く印象づけられ、アメリカへ行くことをいっそう強く決意したのである」⁽⁴⁵⁾。

アジキエは一九三六年の『アフリカン・モーニング・ポスト』紙に発表した「アフリカ人は神をもっているか」という記事のために、イギリスによって煽動罪に問われることになるのはンクルマがアメリカに渡ってからのことである。『自伝』にはアジキエの「アフリカ人は神をもっているか」の記事が詳細に引用されている。ここにはンクルマのナショナリズムの芽生えを読み取ることができる。

四 アメリカ留学

クワメ・ンクルマはアグレイ先生との出会いからアメリカに留学することを決意し学資をためてその準備にとりかかっていた。旅費にも足りなかったので、援助をしてくれそうなナイジェリアのラゴスにいる親戚を訪ねることになる。

「私はラゴスへ向かって出発した。貴重な貯金を旅費に無駄使いするのが惜しくて、アキシムからラゴスへ行く船で密航することにした。私は船員にまじって船に乗り、火夫たちのなかに紛れ込んで、彼らの食事を食べ、ボイラー室のひじょうに窮屈さと熱さを辛抱した。(中略) 顔は洗わず、ひげは剃らず、衣服はぼろぼろだった。だがそのために船の上で働いた人間としか見えず、何の文句もつけられず、ラゴスで船を降りることができた⁽⁴⁶⁾」。

この親戚を訪ねる数ヶ月前にンクルマはリンカーン大学に入学願書を提出している。一九三五年三月一日付けの入学願書は次のとおりである。

「私はどこから始めてどこで終わるのかを知らない。私の生涯の物語は達成したもののひとつではないからだ。さらに、私が成し遂げたことを人に語ることを懸念してしまったからでもない。実を言えば、私の生涯の重荷はセシル・ローズの引用による『メモリアム^(マム)』の一節——達成したことはあまりにも少ない。やるべきことは多い——に要約される。しかしながら、ここまで導かれてきた生涯に薄明かりを投影するにはほとんど言葉を書くという努力もいらないであろう。何はさておき、私は一九〇九年九月二十一日にンジマ——一般的にはヨーロッパ人たちには黄金海岸のアポロニアとして知られている地方ですが——のアキシム経由のンコフルという小さな村に生まれました。私の父は家族とともにハーフ・アシニ——私が生まれたときに逗留していたところで、アキシムから四十マイル離れた町——に行き住んでいました。六歳のときにその町の小学校に行かされました。植民地教育局のスタンダードⅦの試験に運よく合格してその学校の教生(授業を受けながら生徒に教える教員)に任命されました。一年間の教師経験後に、アチモタの師範学校の四年間コースに通いました⁽⁴⁷⁾。大学終了後にはエルミナのカトリック初等学校の校長に任命されました。これは一九三一年の前半のことです」。

クワメ・ンクルマは『自伝』の「まえがき」のなかで次のように語っている。

「一九三四年にリンカーン大学への入学願書を学部長に送った時、私はテニスンの『イン・メモリアル』から次の句を引用した。いつの世にも／なすべきことは／いろいろあるが／なされたことは／少なくて／残されたことは／いかに多いことか。当時の私には、いまでも同じだが、この句が刺激にも激励にもなった。祖国に役立つ人間になりたいという決心を、これが私の内部に燃え上がらせた。だが、この願書を書いたときには、その後私の従うことになった闘争を準備するのにさえ、アメリカで十年、イギリスで二年半も、さらにその闘争で一応の勝利を得るためには、もう八年を費やすことになるうなどとは、夢にも考えていなかった」⁽⁴⁸⁾。

『自伝』の「まえがき」では、アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson) の詩集『イン・メモリアル』の一節を引用して入学願書を提出しているのは事実である。リンカーン大学に残された入学願書を見ると提出した年が違うことと、セシル・ローズからテニスンの詩を孫引きしているという興味深い事実が浮びあがる。『自伝』ではセシル・ローズの名前は抹消されている。もっともガーナ公文書館に残されている資料をみると一九四〇年代に熱狂的な聴衆にむけてテニスンの詩を引用している。セシル・ローズもまた牧師から実業家へと上りつめたことを想起すると、これはンクルマの夢であったと解釈することもできる。

ラゴスの親戚から百ポンド、また、ンサエンムの首長から五十ポンドの旅費をもらい（筆者注・一九六二年にンクルマはンサエンムの首長に就任することになる⁽⁴⁹⁾）、当時、黄金海岸にはアメリカ領事館がなかったのでタコラデイからリバプールに向かう三等の切符を買ってアメリカ査証を取得するためにイギリスに渡った。アパパ号に乗ってタコラデイを出航したのは一九三五年八月六日であり「三等船室に案内された。慣れない環境にはいつて私

はおそろしく孤独を感じ、泣きだしたい思い」だったときに寝台の上に置いてあった「一通の電報」の「封を開くと、シナミジ・アジキエからで、『さよなら、神と自分を信じることを忘れないように』とあった。絶好の時機にとどいたこの数言が、私をたちまち元気づけた。私は数々の天恵を思い、何はともあれ自分が計画し、そのために貯えまでしたことが今始まっているのだと、改めて考えた⁽⁵⁰⁾」と語っている。

イギリス植民地の二等市民として、奨学金もなく査証もなくアメリカに渡るといふ暴挙ともいふべき行動であるが、アジキエの電報に書かれた「さよなら、神と自分を信じることを忘れないように」(Goodbye. Remember to trust in God and in yourself) という言葉にシクルマが勇気づけられたことは確かである。スペイン領のカナリア諸島で娼婦らしき女性との事件はあったが、航海は順調で、リバプールには九月九日に到着している。リバプールではシジマ出身の材木商ジョージ・グラント (George Grant) の世話になり、ロンドンに向かいアメリカの査証を取得したのは十月十七日であった。ロンドン滞在のあいだにクワメ・シクルマにとっては衝撃的な事件を耳にすることになる。

「新聞売りの少年がトラックから新聞の束をおろしながら、興奮してわけのわからないことを叫んでいるのを耳にした。『ムッソリーニ、エチオピアに侵攻』という張り紙が眼にはいった。これが私にかけがえのないものとなった。その一瞬、ロンドンの全部が、私に宣戦を布告しているように感じられた。それから数分間、私はただ通行人の無関心な顔をながめて、これらの人びとはたして植民地主義の偽善を知っているかを疑い、植民地制度をたおすために私の働ける日の来ることを祈った。私の民族意識が前面に昂揚した。その目的を達成するために、必要なら地獄へでも行くか⁽⁵¹⁾と私は決心した」。

イタリアがエチオピア侵略を開始したのは一九三五年十月である。「ムツソリーニ、エチオピアに侵攻」という記事がどの新聞に掲載されたものかはわからないが、翌年五月にはイタリア領エチオピア帝国が成立したことを宣言し、さらに、エリトリアとソマリアを併合してイタリア領東アフリカが形成される。ベルギー領、イギリス領、フランス領、ドイツ領、イタリア領、ポルトガル領、南アフリカ領、スペイン領とアフリカの植民地支配が進んだ時期である。アフリカの争奪戦争 (Scramble for Africa) の爪痕は、赤はイギリス、青はフランス、緑はイタリア、橙はポルトガル、紫はドイツ、黄はベルギーとアフリカ地図は植民地支配を示す色分けがなされた。ンクルマは『自伝』において「自己」の民族意識ナショナルリズムが昂揚したと語っている。『自伝』という形式をとおしてナショナルな自伝を語っていると解釈することができる。

ンクルマは一九三五年十月三十一日にカナード・ホワイト・スター会社の S・S・サマリア号でニューヨークに到着する。ニューヨークに到着するとハーレムに住むトマス・ドスム・ジョンソン (Thomas Dosumu-Johnson) の家に二日間滞在した。

「ニューヨークには知人はいなかったが、リンカーン大学を卒業したシエラレオーネ人と前から手紙をやりとりしていた。だが、渡米の通知を出していなかったもので、タクシーを拾い、彼の最後の手紙に記してあったハーレムの住所を運転手に告げた。うまい具合に彼は家において、私を心から歓迎してくれた。私はすぐにハーレムに慣れ親しみ、ここがアクラではないと信じるのに苦労したほどだ」⁽⁵²⁾。

トマスは当時コロンビア大学師範学校で学んでいた。リンカーン大学に行ったのは学期が始まってから経って二か月近く遅れていた。リンカーン大学は長老派教会の援助をうけて一八五四年に創立された教育機関である。

「リンカーンに着いたとき、私の所持金は四十ポンドにあたるドル紙幣（筆者注・約百八十ドル）と中学校教諭の免許状とS・R・ウッド氏からもらった一通の紹介状だけだった。私は学部長のところへ行き、経済的に困っていること、所持金は全部で四十ポンドしかなく、在学中は働いて勉強したいと話した。（中略）そうかといって私を黄金海岸に送りかえす以外に他の方法はなく、その方法をとるには人がよすぎて、私の申し出を受けて入れてくれた。次の試験でよい成績をとれば第一学年への編入を許可するという約束で、私は見習学生に採用された。（中略）大いに努力したあげく、試験をうけて入学資格を獲得した。（中略）首席と次席の学生は奨学生として学期ごとにある金額を与えられた。幸いなことに私はいつも首席か次席にいたので、リンカーン大学に在学中はずっと奨学金をもらっていた。この奨学金も、必要な費用の一部を補うにすぎなかったが、私にとってきわめて貴重だった⁽⁵³⁾」。

ンクルマの「新世界」への窓が大きく開かれることになった。ンクルマは師範学校でも弁論大会に参加していたが、リンカーン大学でも一九三六年にカップ・アルファ・プシ弁論大会で「アフリカー——ニグロの重荷」(Africa, the Burden of the Negro) の演題で第二位となった。二年後には社会科学の分野でロバート・フレミング・ラバリー記念賞を受賞している。賞金は二十五ドル、主題は「帝国主義——その政治的、社会的、経済的諸側面」(Imperialism: Its Political, Social and Economic Aspects) であつた。⁽⁵⁴⁾ ンクルマはファイ・ベータ・シグマという有名な大学クラブの会員にも推薦されている。

「この会の標語は〈奉仕への教養、人道への奉仕〉であつた。（中略）この会の入会式は拷問と恥辱の連続で、もっとも記念すべき瞬間というのが、野原で猟犬に追われる狐のように、追いかけてとらえられ、殴られたうえで、目隠しをされて人垣のなかに連れこまれ、全員の前でズボンを剥ぎとられるというものである⁽⁵⁵⁾」。

クワメ・ンクルマの『自伝』のひとつの特徴でもあるが、小学校から大学までの学校生活でも、そして、やがて黄金海岸に帰り独立運動で逮捕された監獄生活においても「拷問」「恥辱」「忍耐」という言葉がキーワードになっていることである。また、「私はまた、アメリカにいたあいだフリーメイソンの平会員になっていた」とも語っている。アメリカを代表するフリーメイソンにフランクリンがいることが知られている。一九四〇年代の調査によると、アメリカ四十八州の州知事の内三十四人、九十六人の上院議員の内五十五人がフリーメイソンであるとされている。⁽⁵⁶⁾

クワメ・ンクルマは一九三九年にリンカーン大学を卒業する。経済学と社会学を専攻し学士号 (Bachelor of Arts) を取得している。大学に滞納金があったため学位をすぐにはもらえなかったと語っている。ジャーナリズム学科に進学したいという希望もあったが、その年の秋にリンカーン大学の哲学科の神学と哲学担当の助講師に採用される。ここでも『フランクリン自伝』のような語りがなされる。

「この環境の変化を私は百パーセント利用した。仕事はそれほど忙しくはなかった。だが私には、毎日四六時中動き続けていなければ、時間を浪費しているように思う癖がある。それで、暇な時間に、手にはいる近代哲学の本を片っ端から読みはじめた。カント、ヘーゲル、デカルト、シヨウペンハウエル、ニイチエ、フロイトなどの著書を読んだあげく、法律や医学や芸術が知識の手と足で、哲学がその頭脳であることを知った⁽⁵⁷⁾」。

クワメ・ンクルマは、『自伝』のなかで、カント、ヘーゲル、デカルト、シヨウペンハウエル、ニイチエ、フロイトなどの著書を読んでいたと語る。だが、マルクス、プレハーノフ、レーニンなどの革命家の著書も読んで

いたことは疑いない。ンクルマは哲学が「諸学の頭脳」であることを認識していた。また、哲学者にとって「自伝」を書くことは本質的な仕事であることを認識もしていた。つまり、哲学が規律と訓練のプロセスを経た学問であるかぎり、カント、ヘーゲル、デカルトなどの仕事を尊重し、取捨選択して、新たな視角をあたえ思考するという学問であることをクワメ・ンクルマは哲学をとおして学んだはずである。マルクス、プレハーノフ、レーニンなどの思想から学ぶのはさらに後のこととなる。

ンクルマはその年の終わりに、リンカーン神学校の入学を許可された。と同時に、ペンシルベニア大学で修士号を取得するために哲学と教育学を学んでいる。一九四二年にリンカーン神学校を首席で卒業し神学士号(Bachelor of Theology)を取得している。慣例にしたがって卒業演説がなされてその演題は「エチオピアは神への道を進むのか」(Ethiopia Shall Stretch forth her Hands unto God……)というものであった。ここでもムッソリーニのエチオピア侵攻という帝国主義批判が展開されることになる。しかし、革命家としての思想的、イデオロギーを背景にした帝国主義批判ではなかったように思われる。一九四三年三月にはペンシルベニア大学から哲学修士の学位を授与されている。さらに、哲学博士の学位を取得するために勉学は続けられる。

「大学ではエドガー・シンガー二世教授のもとで哲学を勉強したが、続いて哲学博士の試験を受ける準備をはじめた。教えたり、習ったりするほかに、リンカーン大学からペンシルベニア大学まで五十マイル以上もの距離を毎週三回往復したが、二年間に課程を終え、博士号の予備試験も通った。学位をとるために残っているのは論文をだすことだけだった⁽⁵⁸⁾」。

ンクルマは一九三九年から一九四五年までリンカーン大学で哲学、初級ギリシア語、黒人史の講師となってい

た。特に黒人史 (Negro History) は「もっとも人気があったのは黒人史で、その時間には教室は満員になった。学生たちは黒人史を聞くのを喜んでいたらしいが、私もまたこれを講義するのを楽しみにしていたと思う⁽⁵⁹⁾」と語っている。一九四五年にはリンカーン大学の今年の最優秀教授 (Most Outstanding Professor-Of-The-Year) に選ばれている。ンクルマがこの受賞を知ったのはロンドンに旅立った後のことであると語っている。しかしながら、これらは真実なのだろうか。

(付記)

本稿は、平成二十二年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) (海外学術調査) 「現代アフリカにおける独裁者の虚像と実像に関する民族学的研究」(研究代表者 阿久津昌三) (課題番号 22401040) の研究成果の一部である。

(1) Kwame Nkrumah, *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, Edinburgh: Thomas Nelson and Sons Ltd., 1957 (『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、理論社、一九六〇年)。なお、エリカ・パウエル (Erica Powell) には *Private Secretary (Female)/Gold Coast*, London: C. Hurst & Company, 1984 とする自伝がある。二〇〇七年六月五日の死亡記事はンクルマとの親密な関係などを含めた詳細なものである。

(2) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、評論社、一五頁 (一部改変) (Nkrumah, Ghana: *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, p.1)。ンクルマが誕生し埋葬された村は聖地巡礼の場所となつてゐる。cf. Basil Davidson, *Black Star: A View of the Life and Times of Kwame Nkrumah*, Oxford: James Currey, 2007 (1973), p.13 を参照された。なお、一部改変とあるのは、例えは、邦訳ではンクルマの父は鍛冶師とあるが金細工師であるというように誤訳を含めて修正したことを意味するものである。

(3) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一五頁 (一部改変)。

(4) Nkrumah, Ghana: *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, p.1.

(5) Pierluigi Valsecchi, "The 'Tree Nzema: A Layered Identity,'" *Africa* 71 (3) (2001): 409-410, 419.

- (6) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一五頁（一部改変）。
- (7) Nkrumah, Ghana: *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, p.1.
- (8) Kwame Gyekye, *An Essay on African Philosophical Thought: The Akan Conceptual Scheme*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, pp.170-171.
- (9) *ibid.*, pp.171-172.
- (10) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一五頁（一部改変）。
ローマ・カトリック教会の牧師ゲオルゲ・フィシャー (George Fischer) との出会いにはシクルマ少年の人生の最初の転機を迎えることになる。「私は、ゲオルゲ・フィシャーというドイツ人のローマ・カトリック教会の牧師の感化をうけた。この身体のような、躰のよい教師は私が気にいったらしく、私の勉強を熱心に見てくれた。初等学校のあいだ、まるで私の保護者のようになり、私の両親の初等教育についての責任の多くを除いてくれた。父は宗教心をぜんぜんもたなかったが、母は前にカトリックに改宗していた。この母とフィッシャー神父をとおして、私もローマ・カトリック教会の洗礼を受けた」(シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二四頁)（一部改変）。
- (11) Timony Ansah, *Kundum: Festival of the Nzemas and Ahantias*, Accra: Onyase Printing Press, 1999.
- (12) 出口顯『名前のアルケオロジー』紀伊国屋書店、一九九五年、九七頁。
- (13) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一六頁（一部改変）。
- (14) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一七頁（一部改変）。
- (15) Nkrumah, Ghana: *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, p.12.
- (16) Marika Sherwood, *Kwame Nkrumah: The Year Abroad 1935-1947*, Legon: Freedom Publications, 1996, p.24.
- (17) ジャック・デリダ『根源の彼方にーグラマトロジーについて』足立和浩訳、現代思潮社、一九七二年。
- (18) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一七―一八頁（一部改変）。邦訳では省略されているが、K. A. Busia, *The Position of the Chief in the Modern Political System of Ashanti* (London: Oxford University Press, 1951) から抜粋して書き改めたという出版社の謝辞が述べられている。シクルマの「自伝」の語りにみられる民族誌的記述を裏づけるものである。

- (19) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一七頁（一部改変）。
- (20) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一九―二〇頁（一部改変）。
- (21) Nkrumah, *Ghana: The Autobiography of Kwame Nkrumah*, p.6. また、ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三九頁（一部改変）。
- (22) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二〇頁（一部改変）。
- (23) 福澤諭吉は『学問のすすめ』のなかで第十三編「怨望の人間に害あるを論ず」で「怨望」と翻訳している。例えば、Richard Rathbone, *Nkrumah and the Chief: The Politics of Chieftaincy in Ghana, 1951-60*, Oxford: James Currey, 2000 は、アチェム・アブワクワ (Akyem Abuakwa) 側からクワメ・ンクルマを論じている。
- (24) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三七頁。クワメ・ンクルマが政治的な舞台での衣装については、Barbara S. Monfils, "A Multifaced Image: Kwame Nkrumah's Extrinsic Rhetorical Strategies," *Journal of Black Studies* (University of California) 7 (3) (1977): 313-330 を参照されたい。「自伝」の肖像写真ではケンテクロスというアカンの首長たちがまとう豪華な衣装を着用している。会議人民党 (CPP) では北部ガーナのバタカリ (*batakali*) のスモック、また、ある時には西洋の背広を着ている。ある時には中国の人民服を着ている。独立以前には囚人服を着て公衆の前で演説をしていた。アフリカの政治家の衣装に関しては稿を改めて論述したいと考えている。
- (25) Francis N. Nkrumah, "Primitive Education in West Africa," *Educational Outlook* (School of Education, University of Pennsylvania) 15(2) (January 1941): 87-92。著者の所属はリンカーン大学と記載されている。アーサー・J・ジョーンズは、一八七四年にアイオワ州のグリーンネルに生まれ、一八九三年にグリーンネル大学を卒業する。いくつかのスクールに勤務した後、一九一五年にペンシルベニア大学教授となる。一九四一年にペンシルベニア大学を退官する (Arthur J. Jones, *Principles of Guidance*, New York: McGraw-Hill, 1930)。初版の邦訳には、石谷信保訳『教育指導綱要』（日黒書店、一九三二年）がある。また、第五版の邦訳には、井坂英人訳『生徒指導の原理』（文教書院、一九六八年）がある。
- (26) Francis Nwia-Kofi Nkrumah, "Education and Nationalism in Africa," *Educational Outlook* (School of Education, University of Pennsylvania) 18(1) (November 1943): 32-40。著者の所属はアメリカ・カナダのアフリカ人学生協会

(Africa Student Association of United States and Canada) と記載されている。なお、博士論文題目の草稿は、“Mind and Thought in Primitive Society: A Study in Ethnophilosophy with Special Reference to the Akan Peoples of the Gold Coast, West Africa” (1945)である。ジヨモ・ケニヤッタがマリノフスキーのもとで人類学の論文を書いていったように、クワメ・ンクルマも民族誌を執筆していったことがわかる (Jomo Kenyatta, *Facing Mount: The Traditional Life of the Gikuyu*, London: Heinemann, 1938)。

(27) C. E. Donkoh, *Nkrumah and Busia of Ghana*, Accra: NewTimes Corporation, 1974, p.20.

(28) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二三頁 (一部改変)。

(29) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二三頁 (一部改変)。

(30) エンダバニン・シトレ『アフリカの心』寺本光朗訳、岩波書店、一九六一年、八―九頁 (*African Nationalism*, London: Oxford University Press, 1959)。

(31) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二六頁 (一部改変)。

(32) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二六頁 (一部改変)。

(33) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二七―二八頁 (一部改変)。

(34) T. David Williams, “Sir Gordon Guggisberg and Educational Reform in the Gold Coast, 1919-1927,” *Comparative Education Review* 8(3) (1964): 291-294.

(35) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二七頁 (一部改変)。

(36) Nkrumah, *Ghana: The Autobiography of Kwame Nkrumah*, p.14.

(37) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二八頁 (一部改変)。

(38) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、二二八頁 (一部改変)。マックス・ヴェーバーの『プロテスタントエイズムの倫理と資本主義の精神』は、タルコット・パーソンズによって一九三〇年に翻訳されている。クワメ・ンクルマも英訳の原著を読んでいることは、以下の証言がある (Max Weber, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, translated by Talcott Parsons, London: George Allen & Unwin Ltd., 1930)。ヴェーバーは「牧師の家庭からしばしばぬけた資本主義的企業家が生まれるという事実——最近ではセシル・ローズにいたるまでの——一般

的な現象である」と記述している。

(39) I. S. Ephson, "Dr James Emmanuel Kwegyir Aggrey (1875-1927)," (in) I. S. Ephson, *Gallery of Gold Coast Celebrities*, Accra: Ilen Publications Ltd, 1969; Sylvia M. Jacobs, "James Emman Kwegyir Aggrey: An African Intellectual in the United States," *Journal of Negro History* 81 (1) (1996): 47-61.

(40) ペルプス・ストークス財団 (Phelps-Stokes Fund) はアフリカ人の教育とアフリカの人種関係に関する調査で二五十万ドルを投資している。これらの支出はそれぞれの文化を文明という共通の型に鑄造することを目標としている (Eric S. Yellin, "The (White) Search for (Black) Order: The Phelps-Stokes Fund's First Twenty Years, 1911-1931," *Historian* 65(2) (2002): 342)。また、国家の将来を担うエリート養成を目的として、一九二〇年代にイギリス植民地政府によって創設されたアチモタ学校については Cati Coe, "Educating and African Leadership: Achimota and the Teaching of African Culture in the Gold Coast," *Africa Today* 49(3) (2002): 23-44を参照されたい。

(41) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三二―三三頁 (一部改変)。

(42) Donkoh, *op. cit.*, p.26.

(43) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三三頁 (一部改変)。

(44) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三四頁 (一部改変)。

(45) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三四頁 (一部改変)。ンナミジ・アジキエは、一九〇四年にナイジェリア北部のズンゲルに生まれる。両親はイボの出身で、父親は英領ナイジェリアの両親のもとにナイジェリアの初代大統領を歴任する。一九九六年に九十一歳で亡くなる。

(46) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三四頁 (一部改変)。

(47) Marika Sherwood, *op. cit.*, 1966, p.24.

(48) ンクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、一頁 (一部改変)。テニスの『イン・メモリアル』の著名な一節の原文は次の通りである。

So many worlds, so much to do,
So little done, such things to be,

How know I what had need of thee,

For thou wert strong as thou wert true?

- (49) Ebenezer Obiri Addo, *Kwame Nkrumah: A Case Study of Religion and Politics in Ghana*, Lanham: University Press of America, 1999, p.40.

- (50) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三八頁（一部改変）。また、アジキエは『私のオデュッセイヤー』と題する自伝を執筆している（Nnandi Azikwe, *My Odyssey: An Autobiography*, London: C. Hurst & Company, 1970）。

- (51) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、三八―三九頁（一部改変）。

- (52) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四〇頁（一部改変）。

- (53) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四一頁（一部改変）。

- (54) Sherwood, *op. cit.*, pp.31-32. なお、これの受賞については *West African Review*, August 1936, p.35; January 1939, p.46 に記事があるところ。

- (55) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四二頁（一部改変）。また、吉村正和『フリーメイソン―西欧神秘主義の変容』講談社、一九八九年、一三頁。

- (56) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四二頁（一部改変）。

- (57) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四三頁（一部改変）。

- (58) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四四頁（一部改変）。

- (59) シクルマ『わが祖国への自伝』野間寛二郎訳、四三頁（一部改変）。